

「人々の暮らしを支えるインフラ」として 誇りを持って業務に取り組んでもらいたい

JR 総武本線が銚子まで開通した明治 30 年に創業し、今年で 123 年目を迎えた銚子通運株式会社。同社は、長い歴史に決して胡坐をかくことなく、「現状維持では、後退するばかりである」と、時代の変化に応じた様々な取り組みを積み重ねてきた。

同社を率いる大里忠弘社長は、社員に対し「人々の暮らしを支えるインフラ」として誇りを持って業務に取り組んでもらいたいと、力強く語った。



創業 123 年の歴史を誇る銚子通運。ワインレッドのイメージカラーのトラックの前で記念撮影

■「運送会社として決して遅れずに」 時代の変化を的確に捉えて業務に邁進

千葉県銚子市に本社を構える銚子通運(株) (大里忠弘代表取締役) の歴史は、JR 総武本線が成東駅-銚子駅間を延伸開業した明治 30 (1897) 年までさかのぼることができる。この年の 6 月、同社の前身となる銚子運送店が開業し、鉄道貨物の取扱いや貨車積卸し、集配業務を始めた。昭和 2 年に会社組織に改組(銚子合同運送(株))以降、隣接駅運送店の買収合併を進め、海匝香取地区の農産物と銚子港に水揚げされる水産物を主要取扱貨物としてきた。

昭和 23 年 12 月に商号を現在の銚子通運に変更、その後路線自動車運送事業を開始した。現在は、銚子市内 (2 か所) と香取市内 (1 か所) に 3 営業所を構えている。銚子市内のヒゲタ営業所では、市内で創業したヒゲタ醤油の醤油やめんつゆなどの輸送を手がけているほか、銚子営業所ではキャベツや大根などの地場農産物のほか、水産加工品や塩の輸送などを行っている。

今年で創業 123 年を迎えた歴史ある同社を率いているのが、千葉県トラック協会副会長も務めている大里忠弘社長である。

大里社長は、地元の名家である大里氏の 13 代目として生まれ、大学を卒業してすぐに同社に入社。同社に籍を置きながら 2 年ほど大手運送会社に勤務するなど、業界経験を着実に積み重ねていった。前々社長であった父、そして前社長であった叔父に続いて、同社創業 100 周年を目前にした平成 8 (1996) 年に同社の社長に就任し、これまで 24 年にわたって地元運送業界を力強くけん引してきた。

大里社長がこれまでの経営の中で大事にしてきたことは、「先駆ける必要はないが、遅れるな」ということである。

「銚子は大都会東京から離れていることもあり、どこかゆったり

とした雰囲気があります。しかし、この雰囲気に慣れてしまうと、劇的な時代の変化についていくことができなくなってしまいます。『現状維持では、後退するばかりである』という言葉もありますが、変化に合わせて仕事の進め方を変えていくことができなければ、衰退の一途をたどってしまいます。月に 1 度、営業所長などの管理者が集まる会議の中でもこの言葉をよく使い、現状維持からの脱却を促しています」(大里社長)



大里 忠弘 代表取締役

業界全体で、トラックドライバーの働き方改革の必要性が叫ばれている中において、同社でも荷主との交渉を根気強く行い、仕事の進め方を一歩ずつ改善していくことを通じて、労働生産性向上への取り組みを継続している。

「運送事業者だけではなく、荷主の意識を変え、現状を理解していただかなければ、ドライバーの働き方改革を進めることはできません。特に地方では、少子高齢化に伴う労働力不足が深刻化しつつあることもあり、運送事業者の側だけではなく荷主側でも、拘束時間の削減などといった従業員の働き方改革への取り組みが強く求められています。『いまがまさに交渉にむけての好機』との思いで荷主との交渉を重ね、ともに働き方改革が実現できるよう、今後も努力を積み重ねていきます」(同)



本社敷地内には氏神様の祠を設置。13代目となる大里社長が輸送の安全を祈る



銚子に製造拠点を構えるヒゲタ醤油の醤油やめんつゆなどのほか、地元で採れたキャベツや大根などの輸送も手がける



月に1度開催する「安全衛生委員会」を通じて、さらなる安全性向上に取り組む

銚子市は醤油の製造や漁業、魚介類加工業など、古くから地場産業が盛んな街である。そのため、地元の高等学校を卒業した若年層は、これらの仕事に就くことが少なくないという。また、利根川の対岸にある茨城県神栖市と鹿嶋市にまたがる鹿島臨海工業地帯の工場に就職する高校新卒生も多いこともあり、同社でも若年層ドライバーの採用に苦心しているという。ちなみに、現在在籍しているドライバーの平均年齢は50歳を超えている。

「特に、鹿島臨海工場地帯の工場は大手企業傘下にあるため給与水準も良く、銚子から茨城県側に通勤する人も少なくないのが現状です。ただ、当社は比較的福利厚生面がしっかりしていることもあり、『従業員の定着率の良さ』を特長として挙げることができます。以前当社でも宅配便輸送を行っていたこともあり、女性ドライバーの採用も行ってきました。現在当社では5人の女性ドライバーが在籍し、地元小・中学校への給食配送や、ダンプによる塩輸送などで頑張ってもらっています」(同)

さて、今年に入って新型コロナウイルス感染症が世界的に猛威を振るっている。コロナ禍によって深刻な影響を受けている運送事業者も少なくないが、同社では小・中学校の休校措置に伴い給食配送が一時期取りやめになったほかは、大きな影響は受けていないという。

大里社長は、コロナ禍によって厳しい状況に直面している多くの千葉県ト協会員事業者に向けて、国民の生活を維持するために新型コロナウイルスと最前線で戦っている「エッセンシャルワーカー」として、誇りをもって日々の業務に取り組むことの重要性を訴えた。

「東日本大震災の際には、被災地への緊急支援物資輸送などを通じて、運送事業者に対して多くの国民の皆様から、『日々の生活を守ってくれる、なくてはならないインフラ』だという認識を強く感じていただくことができました。しかし、災害が過ぎると私たちの仕事の重要性はあまり深く認識されることはなく、まるで空気のような存在になってしまいます。私たちトラック運送事業者は、公道を使わせていただき、日々仕事をしています。当社でも、月に1度実施している『安全衛生委員会』の中で、法令遵守と安全輸送の重要性について何度も取り上げ、従業員の意識向上に繋げています。改めて国民の暮らしと我が国の経済を維持していくための重要なインフラとして、我社従業員はもとより、会員企業の皆様には誇りをもっていただき、ともに頑張っていきたいと考えています」(同)

最後に、同社の今後について大里社長に伺った。

大里社長は、今年7月で63歳を迎えた。「大里氏14代目」となる長男は現在26歳で、大手運送会社に就職し、業界経験を積み重ねている。14代目は小さい頃から「いつかこの会社を継ぎたい」と言い続けており、頼もしい存在になっている。

「『自分がいなくても会社が回るようにしていくこと』が、これからの自分の仕事であると感じています。『運送会社として、決して遅れることがないように』との思いを伝えながら、これからも経営基盤を積み重ねていきたいと考えています」(同)

ホットにゆーす

50歳を目前にロードバイクの道に 1か月間に400km走行していた時期も

大里社長は若い頃からスポーツが好きで、幼少期からスキーに親しんだほか、東京での勤務の後に30代で銚子に戻ってくるとサーフィンを始めた。

50歳を目前に、一念発起して始めたのが「自転車(ロードバイク)」である。自転車に乗ること自体は幼いころから好きで、以前も乗っていた時期があったそうだが、本格的に始めてからは1か月あたり300～400kmも走っていたこともあるという。なお、現在でも必ず週1回は、40～50km程度走っている。

また、近年はゴルフにも打ち込んでおり、スポーツとの日々はまだまだ続きそうである。



企業プロフィール

銚子通運株式会社

代表取締役 大里 忠弘
千葉県銚子市三崎町2-2616
従業員 110人(ドライバー90人)
台数 90台